Journal of the Research Institute for
Old Japanese Manuscripts of Buddhist Scriptures
Vol. V 2020

日本古写経研究所研究紀要　第五号（令和2年）

身延文庫蔵「大乗義章第九抄末」所収「一乗義」翻刻

田戸大智

Transcription of The *Meaning of One Vehicle*, in Nine Chapters on The *Daijō gishō shō* 大乗義章抄（a commentary on the *Dacheng yizhang* 大乗義章）owned by Minobu Bunko

Taichi Tado

The *Daijō gishō shō* with 13 chapters owned by Minobu Bunko was created by Kanjin 寛信（1084–1153). It comprises a summary of debates on the *Dacheng yizhang*, which was adopted as the subject of various Buddhist memorial services, including the Thirty Discourses of the *Dacheng yizhang* performed in Todaiji Temple.

In the situation in which the concurrent study of the Sanron School and the Shingon Esoteric Buddhism became common, the *Dacheng yizhang*, which is considered to be written by Jingyingsi Huiyuan 浄影寺慧遠（523–592), had been subject to study not only in Todaiji Tonanin, which was the base of the Sanron School, but also in Daigoji Temple, Ninnaji Temple, Kajyuji Temple, and others since around the Insei Period. It can be said that the results of this study in the Buddhist memorial services in these temples were summarized in the *Daijō gishō shō* owned by Minobu Bunko. Moreover, it is considered that while the Buddhist memorial service, in which debates were performed, became popular and academic sharing progressed, the *Dacheng yizhang* was recognized as one of the basic texts to study, even at schools other than the Sanron.

This transcription of The *Meaning of One Vehicle* in Nine Chapters on the *Daijō gishō shō*（a commentary on the *Dacheng yizhang*）aims also to elucidate parts of the debates conducted during the Insei Period. *The Meaning of One Vehicle* is one of the important subjects in China, Korea, and Japan, and various debates on this subject have been undertaken. In this work, seven questions and answers are exhibited, and regarding debates on vehicles considered in The *Aupamya chapters of the Saddharmapundarīkasūtra* 妙法蓮華経譬喩品, the *Śrīmālādevīsiṃhanādasūtra* 勝鬘経 and Jizang's 吉蔵（549–623）works are referenced centering on the *Dacheng yizhang*.

身延文庫蔵「大乗義章第九抄末」所収「一乗義」翻刻

田戸大智

一　解題

身延文庫蔵「大乗義章抄」十三帖は、勧修寺流の祖とされる寛信（一〇八四～一一五三）が東大寺で行われた「大乗義章三十講」やその他の諸法会で取り上げられた『大乗義章』に関する論義を取りまとめたものであり、現存する論義関連資料で最も古い年記を有している可能性があり、その資料的価値は極めて高い。[1]

そもそも、浄影寺慧遠（五二三～五九二）撰とされる『大乗義章』は、三論と密教の兼学が常態化する中で、院政期頃より三論の拠点であった東大寺東南院だけでなく、醍醐寺や仁和寺、勧修寺等でも修学対象となった。そうした諸寺院の寺内法会で学解された成果が身延文庫蔵「大乗義章抄」に集成されているといっても過言ではない。さらに、論義法会が隆盛となり学問の共有化が醸成される中で、『大乗義章』は他学派においても対論するための基本文献の一つとして認識されていたことが推考される。[2]

さて、同書については、「大乗義章第八抄」所収「二種生死義」の翻刻を既に提示したが、[3]本稿では、中国や朝鮮、日本等で重視されてきた課題の一つである「一乗義」の部分翻刻を試み、院政期における論義の一端を考究することにしたい。

この義科を翻刻する主な理由として、三点を挙げることができる。まず第一点は、現存の慧遠撰『勝鬘経義記』で欠落している部分が「一乗義」に引用され、一部補遺することができるからである。[4]第二点は、吉蔵（五四九～六二三）の逸書である『大般涅槃経疏』の文が引拠されていることである。[5]さらに第三点として重要なのは、東大寺新禅院の聖然（？～一三一二）が一部書写した、吉蔵の論疏ごとに三論宗に関する論題（一二五題）を整理集成した東大寺図書館蔵『恵日古光鈔』十帖に、「一乗義」からの引用が見出されるということである。この事実により、東大寺新禅院周縁にて「大乗義章抄」を活用していたことがはじめて証明された。また、こうした南都における『大乗義章』の修学が、東密論義、特に新義教学を大成させた学僧であり、南都との連携も深かった頼瑜（一二二六～一三〇四）の教学研鑽に少なからず影響を及ぼしていることを指摘しておきたい。[6]

「一乗義」は八問より構成され、『法華経』「譬喩品」に見られる羊車、鹿

車、牛車（声聞・縁覚・菩薩）の三車、さらに大白牛車を加えて四車とする解釈に関する諍論をめぐり、『大乗義章』を中心に『勝鬘経』や吉蔵の論疏等が参照されている。但し、第二問は、装幀の糊付け箇所に差し込まれているため判読できない。

なお、三論宗は三車家と看做されているが、吉蔵は三車四車の会通に努めたようであり、その認識は正鵠を得ていない。[7] この問題をめぐっては、筆録した寛信が、慧遠と吉蔵は三車説に依拠するが、状況に応じて四車説も用いることができると述べている点は注目できよう。詳細な検証については、後日を期したい。

二　凡例

一、本稿は、身延文庫蔵「大乗義章抄」十三帖の一である「大乗義章第九抄末」に収録される五義科（滅尽定義・一乗義・二種荘厳義・二種種性義・証教二行義）の中、「一乗義」の箇所を部分翻刻したものである。

二、本翻刻は、原則として新漢字を使用した。

三、底本には一部送りがなが付されているが、句読点のみ私に付した。

四、原文では、問答箇所が引用典拠箇所より一段下げになっているが、翻刻ではすべて行頭を統一した。

五、校訂者の解釈により、全体を問答ごとに分割し、冒頭に【　】で問答番号を挿入した。

六、原文の異体字や略字、俗字等は基本的に現行の正字に改めた。

　　畧→略など

七、以下の文字は本来別字であるが、慣用に合わせて置き換えた。

　　尺→釈　廿→二十

八、以下の仏教省文草体は、本来の形に還元した。

　　灰→涅槃　井→菩薩　并→菩提　め→婆娑

九、脱字や誤記の註記は、原文どおり行間に記した。

十、中略の箇所は、原文と同じく〇で示した。

十一、虫食いや判読不能の箇所は、□を用いて示した。

十二、装幀の糊付けにより判読不能の部分で、引用典籍の原文から補える箇所は、（　）を用いて記した。

十三、装幀の糊付けにより判読不能の部分で、東大寺図書館蔵『恵日古光鈔』の引用文から補える箇所は、〈　〉を用いて記した。

十四、書誌的概要は、次のとおりである。

〔書写年代〕文和四年（一三五五）

〔書写者〕寥海

〔外題〕義章第九抄末

〔内題〕滅尽定義

〔尾題〕大乗義章第九抄末

〔奥書〕根本本奥書無之

　　御室御本　二校了

　　文和四年九月二十六日書写了　赤羽漸落

　　紫毫弥進者也　　桑門寥海　二十七　通七

〔墨印〕身延文庫

粘葉装、表紙（茶）、楮紙、一帖、全二八丁、縦二七・四糎、横二〇・〇糎、

一頁一一行、一行約二〇字前後

三　目　次

【第一問】問。釈彼(破カ)別一乗引法花無二無三之文。爾者、其無二無三者、何釈乎。

【第二問】（装幀の糊付けにより判読不能）

【第三問】問。付会別一乗、且可開会種性声聞所行乎。

【第四問】問。会別一乗者、明四車義歟。

【第五問】問。為証会別一乗、引何文乎。

【第六問】問。釈会別一乗、引勝鬘経何文乎。

【第七問】問。証会三一乗、引法花何文乎。

【第八問】問。付会別一乗、論実唯一大乗云云。爾者、引何文証之乎。

四　本　文

一乗義

【第一問】

問。釈彼(破カ)別一乗、引法花無二無三之文。爾者、其無二無三者、何釈乎。進云、無二者、一大乗外無声聞縁覚二乗。無三者、一大乗外無声聞縁覚二乗、幷無随化所施大乗云云。付之、此文者、以仏乗為第一、縁覚為第二、声聞為第三。対一説二三。何二三中含多種乎。不叶文首尾、其疑顕然。依之、見経前後文、或云如来但以一仏乗故、無有余乗若二若三。是以仏乗為第一、縁覚為第二、声聞為第三。宝性論・十住毗婆娑論有成説云云。又云、尚無二乗、何況有三云云。是挙勝況劣。而無三者、云偏行六度菩薩者。是豈劣於二乗乎。又云、唯此一事実、余二則非真云云。此則頌長行無二亦無三也。又云、諸仏語無異、唯一無二乗云云。嘉祥大師引此等八証破四車義。其理叶道理。何会之乎。

（章云、言破別者、仏随衆生仮施三乗、衆生聞已執為定実。仏為破其所執仮三。是故言一。故経説言、十方仏）土唯一仏乗無二無三。又経亦言、唯此一実、余二非真。言無二者、一大乗外無別声聞縁覚二乗。言無三者、一大乗外無別声聞縁覚二乗、幷無随化所施大乗。問曰、直説無三之時、無二已竟。何須別説無二無三。釈言、声聞縁覚乗者、大乗家対。然大有二。一者実大、二者権大。声聞縁覚非直是彼実大家対。当知、亦是権大家対。言無二者、無実大家所対二也。言無三者、無権大家所二乗、幷無権大。故言無三。何者実大。如華厳等所説是也。彼説、菩薩実修一切十三住中無漏真徳、息除妄想証性成仏故、名為実。何者権大。如彼三乗別教之中所説是也。彼説、菩薩三阿僧祇但修有漏六波羅蜜、不習諸地無漏真徳度三僧祇。次於百劫修相好業、於最後身修世八禅、厭断煩悩後観四諦道樹成仏。言、不称実故名権大。破斯権大幷破余小。是故言一云云。

上文(文句四)云、釈長行之処。〇　光宅云、無縁覚声聞之二、無偏行菩薩之三。此文之事入之。略之。今言、但一仏乗者、純説仏法之円教乗也。無余乗者、無別教帯方便有余之説。無二者、無般若中之帯二。無三者、無方等中所対之三也。如此二三皆無。況三蔵中三耶云云。

又云(釈偈之処。)従十方仏土中下、第三一行三句、頌上如来（但以一仏乗為衆生説法無有余乗若二若三。若十方仏唯説一法、即是教一。仮名引導即方便教也。牒）仮名三教、顕仏恵一教。其文分明。無有余乗者、無別教中円入別之余也。

無二者、無通教中半満相対之二也。無三者、無三蔵中之三。如此等二三、皆是仮名字。引導諸衆生、今但一仏円教乗也。従諸仏出於世唯此一事実下、第四有三行三句、頌上諸有所作常為一事行一之文也云云。

宝性論第三云、依能調所証、弟子為三乗、信三供養等、是故説三宝。此偈明何義。略説、依三種義、為六種人故説三宝。何等為三。一者調御師、二者調御師法、三者調御師弟子。偈言、依能調所証弟子故。六種人者、何等為六。一者大乗、二者中乗、三者小乗、四者信仏、五者信法、六者信僧云云。

自余経論文、如大乗玄抄之。可見之。

法花玄四云、初明一乗義、即釈会三帰一義。問。経云、十方仏土中、唯有一乗法、無二亦無三。云何名為無二無三耶。答。有人言、無二者、無声聞縁覚[二]。無三者、無偏行六度菩薩乗。又昔三乗皆是方便。今教別有一大車。異昔三也。問。何以知然。答。経云、仏以方便力、示以三乗教。既以三為方便、則以一為真実。則会昔三乗、帰今一実也。又云、願賜我等三種宝車。昔既索三、今便賜一。故索所不（与与所不索。即知別有大車、異昔三小。以文理推之、即有四車也。評曰、三車諍論、紛綸由来久矣。了之即一部可通。迷之即七軸皆壅。今以八文）徴之。方見此釈為謬。第一文云、如来但以一仏乗故、為衆生説法。無有余乗若二若三。此文次第列三乗也。但以一仏乗者、謂仏乗為第一也。無有余乗若二若三者、無有縁覚為第二、声聞為第三。以此文詳之、則唯有三車。則執四為謬矣。〇　第二文云、尚無二乗何況有三。夫論挙況者、皆挙勝以況劣。若言第三是偏行六度菩薩者、昔三乗中、仏乗為勝、二乗為劣。若言第三、乃応挙三況余二。云何挙二況第三耶。三者、偈云、唯此一事実、余二則非真。唯此一事者、即一仏乗実也。余二則非真。縁覚声聞、此二非真也。即以偈文、長行文釈無二無三意。仏恐像末鈍根尋経不解故、転勢頌之、令煥然易悟。第四文云、諸仏語無異、唯一無二乗。全同前矣。第五文云、但以一乗法、教化諸菩薩。無声聞弟子。此文最分明。既云但以一乗教化菩薩、則有菩薩也。無声聞弟子、即無余二乗也。六者、信解品云、密遣二人。七者、化城喩品云、世間無有二乗而得滅度。唯一仏乗得滅度耳。八者、偈云、唯有一仏乗息処故説二。諸文甚多、略挙八証。此釈既非、則四乗義謬。会三亦失矣。復有人言、但有三乗。会三帰一者、帰三中仏乗。非三外別有一也。評曰、若但有三乗、不違八証。尋経首尾、復害六文。仏以方便力、示三乗教。則知、三乗皆是方便。云（何会二方便、帰一方便耶。又云、於一仏乗、分別説三。又云、於一仏乗、随宜説三。又諸子索三、父皆不与、明無三可）趣索、有一以賜機。若三中之一是実有者、諸子無所索、父無所賜也。又虚指門外明有三車、諸子出門無三可見。若三中之一是実有者、父非虚指、子出応見。又三中之一是実者、則会二帰一、不名会三帰一。問。立四則違八証、弁三復害六文。請会通之令無豪滞。世間浅識言不相違。況復一切智人説応鉾楯。又如来説八万法蔵乃至塵沙法門、尚無二言。況一経之中応有両説。定知、失在学人。何復嫌大近。答。今明者、八証六文、猶一意耳。且会二文余皆可領。一云、方便説三。次云、唯一是実余二非実者、唯一仏乗欲引導衆生故、方便説三。考実而言、唯一仏乗。是実余二非真。是故、説三説二。猶一意耳。請設遠近喩、以況遠旨。如父手中唯有一菓。欲引諸子説一菓為三菓。考実而論、唯有一菓無二菓。是故、二文無相違也。以三二既明、会義可領。晩見法花論、釈十方仏土中尚無二乗何況有三。与今意同。論云、此是遮義。遮者、明無二乗涅槃唯仏究竟無上菩提有大涅槃耳。此但明無有二乗唯有仏乗。不言無偏行六度菩薩乗。故光宅失旨也云云。大乗玄一乗義文言、始終全与此同。

尋云、付嘉祥三車義、破有人三車説、引法花六文破之。皆見四車義、爾成破

自義乎。

〈私云、有人与嘉祥共難在三車。有人破三中二乗帰其一實云云。嘉祥破心不爾、違経方便説三。此文釈〉三共方便破也。自義、方便之詞可互三乗。心於唯一仏乗、為化二乗、仮説三乗。何三乗共成方便。顕実破二乗之日、仏乗之上方便義、已遂成一仏乗也。掌中菓、二果一果喩分明。仮説三菓之時、一菓之中帯方便、開掌之時、一菓已顕。此一菓非従其別来也。此義出□也。可思之。

珍海已講云、嘉祥又用四車之義云云。

又付三車義破権大歟。若云破者、無其文品破二乗也。若不破之者、已権乗也。何不破之乎。能々可思之。

文句四云、第三師也。一二略之。有人言、無縁覚為無二、無声聞為無三、存於菩薩大乗。若爾、只無三蔵中二乗、不無三蔵中菩薩。此存有余、何関一仏乗。何処経論以声聞為第三。既無此次第、都是妄説。若依汝解、無二是無縁覚、無三是無菩薩。第一是声聞応不被無。若如此者、則大倒乱云云。

疏記四云、第三師同於嘉祥。嘉祥尚然。故並不知三乗共位。及瓔珞等次第行者、是方便菩薩。若不爾者、何故大瓔珞第九三道品中恵眼菩薩問仏云、云何三乗。仏言、菩薩乗者、復有三種。謂菩薩大乗、菩薩支仏、菩薩声聞。支仏亦三。謂支仏大乗、支仏支仏、支仏声聞。声聞亦三。謂声聞大乗、声聞支仏、声聞声聞。故知、菩薩三者、別菩薩也云云。

私云、此文可成章無三義云云。其理顕然也。

【第二問】（装幀の糊付けにより、二行分判読不能）

三車義□非章□今四車之証如何。

章云、如上

私云、学者為難義。愚案、余二者、非二乗。以実大二乗及権大三乗為余二。章引合無二無三之文、而釈無二亦無三為会三一乗、於唯一事実文、無釈。知、是同義歟。爰玄論云、以偈頌唯自一実文、釈長行無二無三文云云。嘉祥浄影用三乗。四乗雖異、以偈釈長行、其義可用。如□此釈欲出□了。花厳釈云云。

又或云、法花以会二乗為出之故、四車之義又□此文也云云。

五教章上云、一乗義一明一乗於中有七。○四約殊勝門。即以三中大乗為一乗。以望別教、雖権実有異、同是菩薩所乗。是故、故経云、唯此一事実、余二則非真。又云、止息故説二乗等。此文有二意。一若望上別教、余二者、即大小二乗也。以声聞等利鈍雖殊、同期小果故。開一異三故。若望同教、即声聞等為二也。又融大同一故也云云。

【第三問】

問。付会別一乗、且可開会種性声聞所行乎。

【第四問】

問。会別一乗者、明四車義歟。

章云、言会別者、惣唯一大。仏随衆生、分一為三。今還摂三以帰一大。因無異趣、果無別従。是故言一。故経説（言、説大威儀、以為木叉毘尼法等。木叉毘尼即大乗学。又経復言、声聞縁覚乗即是大乗。法花亦云、汝等所行）是菩薩道。良以根本無二法故云云。

尋云、種性声聞開会両様有疑。若云開会者、法花論釈汝等所行是菩薩道之文、判退菩提心人。況種性声聞古今未発心。依之、金陵大師釈云、種性声聞有破無余云云。若言不開会者、於一乗随縁開三。因無異趣、果無別従。何不会之

乎。

私云、開会也。開会与廻心、別事也。可思之。

又、疑云、所引三義、共為三車之証。如何。能々可案之。

【第五問】

問。為証会別一乗、引何文乎。進云、説大威儀、以為木叉毘尼法等云云。付之、会一乗行令会□□別一乗。此文□□説大威儀為木叉毘尼□□三乗行。何引之証此義乎。

章云、言会別者、惣唯一大。仏随衆生、分一為三。今還摂三以帰一大。故経説言、説大威儀以木叉毘尼法等。木叉毘尼即大乗学云云。

勝鬘経云、○ 一切声聞縁覚世間出世間善法、依於大乗而得増長。是故、世尊、住於大乗摂受大乗、即是住於二乗、摂受二乗一切世間出世間善法。如世尊説六処。何等為六。謂正法住、正法滅、波羅提木叉、比尼、出家、受具足。為大乗故、説此六処。○ 是故、説大乗威儀戒是比丘尼。是（出家、是受具足云云。

勝鬘宝窟云、住於大乗者、明大乗人住大乗之法。摂）受大乗者、智了悟大乗也。○ 即是住於二乗摂受二乗者、大外無別小乗。小乗即是大乗麁近之法。故云即是住於二乗摂受二乗也。○ 如世尊説六処者、惣挙如来昔説於六。所以挙昔六者、此是小乗経中説於六処。将欲会小入大故、前説小也。○ 何等已下、次列於六、釈六不同。今且為三双。一法住法滅一双。二約戒法得離一双。三約人始終一双。正法住、正法滅者、問。云何為正法、云何為住滅。答。依雑心、経、律、阿毘曇、是名俗正法。○ 通論三蔵住滅。若別論、正弁戒律住滅。以戒律正是出家人所行故。如云戒律是仏法寿命。戒律住故仏法住。戒律滅故仏法滅。就戒律中、○ 今正論別解脱戒住滅也。○ 波羅提木叉、毘尼、第二得離一双。此文来有多意。上云法住法滅通三蔵。今則別明以戒律正是出家所行。故所以別明。○ 所以立波羅提木叉毘尼二名者、有其多義。一者得離之名。波羅提木叉。此云報解脱。持戒之因得解脱報故云報解脱。○ 毘尼者、此翻為滅。謂滅現在身口七非。離過為称。○ 余義等略之。出家、受具足者、第三約人有始終一双。始則出家、終則受具足。○ 又詳文大意、此六始終但明一戒法。初明戒住滅、次明戒法得離、後明戒法始終。以戒是三学本故也。戒法既爾、余行類爾。為大乗故、説此六処者、第二会小入大。○ 是故、説大乗威儀下、○ （以説大乗威儀。為彼毘尼出家受具足戒。是故、毘尼出家受具足、即以大乗也云云）。

【第六問】

問。釈会別一乗、引勝鬘経何文乎。進云、声聞縁覚乗即是大乗云云。付之、此是会二乗明一乗也。章之意、余三乗為一乗、還是難文也。非其証如何。

章云、又経復言、声聞縁覚即是大乗云云。

勝鬘経云、何以故。声聞縁覚乗皆入大乗。大乗者即是仏乗。是故、三乗即是一乗。得一乗者、得阿耨多羅三藐三菩提云云。

義記下云、何以故下、問答弁釈。何故問也。二乗別異。何等能得阿耨菩提下、対釈之。彰彼二乗同入大乗故。得菩提句、別有四。一カ二、明声聞縁覚皆入大乗。二、釈乗者、即是仏乗弁定所入大乗之義。説通因果、簡果異因□仏□□言大乗即是仏□。三、是故三乗即是一乗。結小入大。是彼二乗皆入大故、三乗即一。於二実一畢竟不殊故、三乗□是一乗。亦可於化所施三乗同於一乗、名三即一。四、得一乗者、得菩提下、以乗為道得一乗故、当得菩提云云。

【第七問】

問。証会三一乗、引法花何文乎。進云、汝等所行是菩薩道云云。付之、此是説種子無上也。専非会三一乗故。法花論釈種子無上、引此汝等所行文云、謂発菩提心退已還発。前所修行善根不滅同以得果故云云。如何。

章云、法花亦云、汝等所行是菩薩道。良以根本無二法故云云。

義疏八云、汝等所行是菩薩道者、昔説大因為小果。今指小（果為大因。故二乗之果是菩薩道。法花論明無上義、有十種。一者、示現種子無上故、説雲雨譬喩。汝等所行是菩薩）道者、謂発菩提心退已還発。前所修行善根不滅同以得果故。此意明本菩提心不滅故、此善根即無上種子。由此種子故、今聞法花、即是雲雨以得成仏也。問。若爾、決定声聞善根、応非菩薩道也耶。答。決定之人、則是守迷封執小果、則被破不会。若転悟者、則会而不破也云云。

疑云、付義疏釈、其義与所引論文遙以乖角。汝等所引者、昔説大因以小果。今指小果為大因云云。此則開会之義也。而論文者、以昔発心為因、生今大心云云。不用中間小果之如何。私云、以法花論文非直為会別之証。以退菩提心声聞已発大心、証開会小行為実之義也。能々可思。学者為難義。有人云、義疏有二意。法花論無別義也。今謂不爾。論若別義者、可有或又等之字。不叶文。起□愚難委細歟。

【第八問】

問。付会別一乗、論実唯一大乗云云。爾者、引何文証之乎。進云、故経説云、世若無仏、非無二乗証二菩薩。一切世界唯一仏乗云云。付之、此文明破別一乗也。与法花十方仏土中、唯有一乗法、無二亦無三、全無差別。如何。

章云、問曰、乗者、人之所行。三乗人別随人説乗。乗応定別。云何為一。釈言、此以理一故爾。故経中説三乗雖異同一仏性。○ 故経説言、世若無仏、非無二乗証二涅槃。一切世界唯（一仏乗。更無余故、無別二乗得二涅槃。会別如是云云。

涅槃経十一云、○ 世若無仏、非無二乗得二涅槃。迦葉復言、）是義云何。仏言、無量無辺阿僧祇劫、乃有一仏出現於世間云云。

義記四云、○ 前中初言世若無仏、非無二乗得二涅槃、乃明二乗無別所得。若正応言一切世間唯一仏乗故、無二乗得二種涅槃、此猶経中十方仏土唯一仏乗無二無三云云。

義記十云、世若無仏者、仏道長遠、此人未即可得故、言無。非無二乗得二涅槃者、為縁禅。此長遠故、□説二乗涅槃。未成仏前、得此涅槃、久久方復成仏故、云乃有一仏出世也云云。

註

（1） 同書の概要については、拙著『中世東密教学形成論』第四部（法藏館、二〇一八）で論及した。

（2） 松本知己『院政期天台教学の研究—宝地房証真の思想—』第四部（法藏館、二〇一九）参照。

（3） 拙稿「日本における『大乗義章』の受容と展開—附 身延文庫蔵「大乗義章第八抄」所収「二種生死義」翻刻」（金剛大学仏教文化研究所編『地論宗の研究』国書刊行会、二〇一七）参照。

（4） 『勝鬘経義記』下巻については、藤井教公氏が『新纂大日本続蔵経』一九（図書刊行会、一九八四）にて、Pelliot 3308 と Pelliot 2091 を用いて校訂・加点しているが、それでもなお『勝鬘経』の一部（大正蔵本で約一頁）に対する註釈

に欠落が存在している。「一乗義」の引用は、その箇所を部分的に補うものである。

（5）吉蔵の同書については、平井俊榮「吉蔵著『大般涅槃経疏』逸文の研究（上）（下）」（『南都仏教』二七・二九、一九七一）に逸文が集成されている。「一乗義」掉尾の「義記十云」は、慧遠『大般涅槃経義記』ではなく吉蔵の註釈書と推測され、平井氏の逸文集成には見出せないものである。

（6）このことについては、拙稿「東密論義と南都教学―三論宗との関係を中心に―」（龍谷大学アジア仏教文化研究センター編『日本仏教と論義』法藏館、二〇二〇）で論述した。

（7）吉蔵の解釈や日本における三車四車の論争については、末光愛正「吉蔵三車家説の誤りについて」（『曹洞宗研究員研究生研究紀要』一六、一九八四）、同「吉蔵の『法華玄論』巻第四「一乗義」について」（『印仏研』三三―一、一九八四）、同「吉蔵の一乗思想」（『駒澤大学仏教学部論集』一三、一九八二）、蓑輪顕量「平安時代初期の三車四車の諍論」（『大倉山論集』三五、一九九四）等を参照した。

※本翻刻及び影印の掲載に当たっては、身延山久遠寺、身延文庫、同文庫主事の渡辺永祥先生に格別なるご配慮を賜った。ここに衷心より感謝申し上げる。
※本研究は、JSPS 科研費 JP19K00068 の助成を受けたものである。